

令和7年(2025年)8月25日

企画展 「石田逸翁と秀蘭 —高宮出身の兄妹絵師—」

を開催します

このたび、彦根城博物館において、みだしの展示をいたしますのでお知らせします。つきましては、広報方についてよろしくご高配のほどお願い申し上げます。

記

1 名 称

企画展「石田逸翁と秀蘭 —高宮出身の兄妹絵師—」

2 会 期

令和7年(2025年)8月28日(木)～9月23日(火・祝)【26日間】

＊9月2日(火)は休館

開館時間：午前8時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）

3 会 場

彦根城博物館 展示室1・6

4 展示の趣旨

石田逸翁^{いしだいつおう}（1800-69）は、近江国犬上郡高宮^{たかみや}（現彦根市高宮町）出身で、京で活躍した絵師です。高宮は中山道の宿場のひとつで、逸翁は、この地で代々寺子屋の師匠をつとめる家に生まれました。字は孟敬、通称は永蔵と宮内、逸翁は号で、若い時分から名乗った秀峰の別号もあります。

逸翁がいつ京に出たのかは不明ですが、岸派の祖・岸駒門人^{がんく しらい かよう}の白井華陽^{しらい かよう}の門に入りました。岸派は、当時の京の有力画派のひとつで、円山派などの各流派を折衷しつつ、あくの強い独特の画風を最大の特色とします。現存が確認できる逸翁の作品を概観すると、大枠では当時の岸派の画風の範疇に入るもので、特に故事人物図を得意としていたようです。

逸翁は、天保4年(1833)、御室の仁和寺門跡より法橋に、弘化4年(1847)には法眼に叙せられました。京の有名文化人名録とも言うべき『平安人物志』嘉永5年(1852)版に掲載されるなど、京で絵師として知られた存在であったことが確認できます。また、地元では、高宮と同じ犬上郡内の南河瀬村（現彦根市南川瀬町）に逸翁の親戚にあたる旧家が在り、晩年の作品を中心に逸翁作品が数多く伝存しています。珍しい大和絵風の雛図や法事の際に贈られた仏画も含まれるなど、画の描かれた背景を窺うことができる貴重な作品群と言えるものです。

逸翁には3歳下の妹、秀蘭^{しゅうらん}（1803-63）がいました。秀蘭もまた絵を描き、好んで花鳥画を手がけたといわれます。16歳で剃髪して智光院と称しました。秀蘭は号で、清月という別号もあります。若い頃の画風から兄に画を習ったと目されますが、その画は、一筆一筆を丁寧に描き、年を重ねても愛らしい品の良さを感じさせます。専ら桜画を描いていた同時代の女性、織田瑟瑟^{おだ しつしつ}（近江国神崎郡住、1779-

1832)の画の影響も見られ、多様な画を参考に作画していた可能性を指摘できます。

本展は、現在ではほとんど知られることがなくなった石田逸翁・秀蘭を紹介する初の展覧会です。

5 展示作品

別添リストの51件

＊期間中、一部作品の展示替をおこないます（前期：8/28～9/10 後期：9/11～23）。

6 観覧料

一 般 700円

小・中学生 350円

＊30名以上の団体割引等あり

＊常設展「“ほんもの”との出会い」も併せてご覧いただけます。

7 刊行物

図録『石田逸翁と秀蘭 ―高宮出身の兄妹絵師―』（A4版、カラー、表紙を含め60頁）を刊行します。

＊刊行後に、実物とあわせて、価格、販売方法等を改めてお知らせします。

8 関連事業

(1)講演会「石田逸翁・秀蘭兄妹の画業」

日 時：令和7年(2025年)9月6日(土) 午後2時～ ＊90分程度

会 場：彦根城博物館 講堂

定 員：50名（当日先着順）

講 師：高木文恵（当館学芸員）

資料代：100円（彦根市内の中学生以下は無料）

＊展示室への入室には、別途観覧料が必要

(2)ギャラリートーク（展示解説）

日 時：令和7年(2025年)8月30日(土) 午後2時～ ＊40分程度

会 場：彦根城博物館 展示室1・6

講 師：高木文恵（当館学芸員）

その他：観覧料が必要

問い合わせ先

彦根市教育委員会事務局

彦根城博物館 学芸史料課

担当：高 木 文 恵

（電話 0749-22-6100）

企画展「石田逸翁と秀蘭 – 高宮出身の兄妹絵師 –」展示作品リスト

番号	資料名称	作者	数量	品質形状	制作年	所蔵者	展示期間	
							～9/10	9/11～
【石田逸翁】								
1	海棠に孔雀図	石田逸翁	1幅	絹本著色	江戸時代後期	個人		
2	寒山拾得図	石田逸翁	1幅	紙本墨画	天保4年 1833年	円常寺		
3	芦に鶴画賛	画：石田逸翁 賛：賀茂季鷹	1幅	紙本淡彩	天保4年 1833年	個人		
4	阿弥陀二十五菩薩来迎図	石田逸翁	1幅	絹本著色	天保7年 1836年	個人		
5	桃園結義図	石田逸翁	1幅	絹本著色	弘化2年 1845年	円常寺		
6	雲龍図	石田逸翁	1幅	絹本墨画	江戸時代後期	個人		
7	高砂画賛	画：石田逸翁 賛：萬壑文通	1幅	紙本淡彩	江戸時代後期	個人		
8	牽牛織女図	石田逸翁	1幅	絹本淡彩	嘉永5年 1852年	個人		
9	恵比寿図	石田逸翁	1幅	紙本淡彩	江戸時代後期	個人		
10	寿老人図	石田逸翁	1幅	絹本淡彩	江戸時代後期	個人		
11	郭子儀図	石田逸翁	1幅	紙本著色	江戸時代後期	個人		
12	巳の神杉図	石田逸翁	1幅	絹本墨画	江戸時代後期	個人		
13	蓬萊図	石田逸翁	1幅	紙本淡彩	江戸時代後期	個人		
14	蓬萊図	石田逸翁	1幅	絹本淡彩	江戸時代後期	個人		
15	嵐山春景図	石田逸翁	1幅	絹本淡彩	安政6年 1859年	個人		
16	豊臣秀吉像	石田逸翁	1幅	絹本著色	江戸時代後期	個人		
17	雛図	石田逸翁	1幅	絹本著色	江戸時代後期	個人		
18	虎溪三笑図	石田逸翁	1幅	絹本淡彩	江戸時代後期	個人		
19	飲中八仙図	石田逸翁	1幅	絹本著色	江戸時代後期	個人		
20	飲中八仙図	石田逸翁	2幅	絹本著色	慶応元年 1865年	円常寺		
21	郭子儀図	石田逸翁	1幅	絹本著色	慶応元年 1865年	個人		
22	松鶴長春図	石田逸翁	1幅	絹本著色	江戸時代後期	個人		
23	二十四孝図	石田逸翁	6曲1双	紙本淡彩	江戸時代後期	個人	右隻	左隻
24	山水人物図	石田逸翁	6曲1隻	紙本淡彩	文久4年 1864年	個人		
25	唐子遊び図	石田逸翁	2曲1隻	紙本淡彩	江戸時代後期	個人		
26	仔犬図	石田逸翁	1幅	紙本墨画淡彩	江戸時代後期	個人		
27	釈迦十大弟子像	石田逸翁	1幅	紙本淡彩	江戸時代後期～ 明治時代初期	個人		
28	『平安人物志』 嘉永5年版		1冊	紙本木版摺	嘉永5年 1852年	当館		
29	日記	小林和兵衛	1冊	紙本墨書	嘉永2年 1849年	個人		
30	石田逸翁書状　小林惣兵衛・ 和平（和兵衛）宛		1通	紙本墨書	(嘉永2年(1849)) 7月20日	個人		
31	尼妙入廿七回忌取延法事記		1冊	紙本墨書	明治2年 1869年	個人		

番号	資料名称	作者	数量	品質形状	制作年	所蔵者	展示期間	
							～9/10	9/11～
【秀蘭】								
32	七福神図	秀蘭	1幅	絹本著色	江戸時代後期	個人		
33	桜に鷹図	秀蘭	1幅	絹本著色	江戸時代後期	個人		
34	桜に猿図	秀蘭	1幅	絹本著色	江戸時代後期	個人		
35	桜に鷹図	秀蘭	1幅	絹本著色	江戸時代後期	個人		
36	富士に雲龍図	秀蘭	1面	紙本墨画	江戸時代後期	個人		
37	富士に鶴図	秀蘭	1枚	紙本墨画淡彩	江戸時代後期	個人		
38	富士図	秀蘭	1枚	紙本墨画	江戸時代後期	個人		
39	善光寺式阿弥陀三尊像	秀蘭	1幅	絹本著色	江戸時代後期	個人		
40	四季耕作図	秀蘭	6曲1隻	紙本淡彩	江戸時代後期	個人		
41	花鳥図	秀蘭	2曲1双	紙本著色	江戸時代後期	個人		
42	尼狐図	秀蘭	1幅	紙本淡彩	江戸時代後期	個人		
43	恵比寿布袋大黒図	秀蘭	1幅	絹本著色	文久2年 1862年	個人		
44	早乙女画賛	画：秀蘭 賛：文海	1枚	紙本墨画淡彩	文久2年 1862年	個人		
45	蓮池図	秀蘭	6曲1隻	絹本著色	文久2年 1862年	個人		
【逸翁・秀蘭合作】								
46	梅に小禽図 ※展示面	石田逸翁	天袋2面	紙本著色	江戸時代後期	個人		
	富士図	石田逸翁		紙本金地墨画	江戸時代後期			
47	竹林七賢図	秀蘭	地袋2面	紙本墨画淡彩	江戸時代後期	個人		
	飲中八仙図 ※展示面	秀蘭		紙本墨画淡彩	江戸時代後期			
48	雲龍図 ※展示面	石田逸翁	天袋4面	紙本墨画	江戸時代後期	個人		
	旭日に時鳥図	石田逸翁		紙本著色	江戸時代後期			
【師・白井華陽と子・石田孤峰】								
49	虎図	白井華陽	1幅	絹本淡彩	江戸時代後期	個人		
50	五子十童之図	石田孤峰	1枚	紙本著色	嘉永5年 1852年	個人		
51	人物図	石田孤峰	1枚	紙本淡彩	江戸時代後期	個人		

写真解説

*番号は作品リストの番号と一致します。

1 かいとう くじゃくず 海棠に孔雀図 石田逸翁筆 1 幅

絹本著色

縦107.2cm 横50.0cm

江戸時代後期

個人蔵

これまで確認できた、唯一初期と見られる作品。全体に少し荒々しさが感じられる筆法、孔雀の表情や羽根の広がり、孔雀に対する海棠の簡素な表現等、岸派の祖・岸駒作品を源流とすることが明らかなです。線と賦彩とで表現する孔雀はある程度の域に達していると言えますが、線を用いない没骨の技法であらわす樹木には、いまだ拙さが目立ちます。落款は、早い時期から使用していたと見られる「秀峰」とあります。



4 あみだ にじゅうご ぼさつらいどうず 阿弥陀二十五菩薩来迎図 石田逸翁筆 1 幅

絹本著色

縦125.7cm 横55.4cm

天保7年(1836)

個人蔵

阿弥陀仏が二十五菩薩を従えて往生者のもとへ迎えに来る仏画。画面下部には位牌が配され、法号等を書き込む形となっています。絵仏師の作に比しても遜色のない本格的な作域で、謹直な筆線と丁寧な賦彩とで入念に描き込んでいます。

本作は天保7年(1836)の7月の作ですが、前年11月に母が、当年2月に父が相次いで亡くなっており、このことが制作背景にある可能性も考えられます。親族の位牌が列なる中に、逸翁の師、白井華陽の名も確認出来ます。



(部分) 白井華陽の位牌



5 ^{とうえんけつぎ} 桃園結義図 石田逸翁筆 1 幅

絹本著色

縦114.6cm 横55.8cm

弘化2年(1845)

円常寺蔵

中国の『^{さんごくしえんぎ}三国志演義』等にあらわされた、有名な「桃園の誓い」の図。^{りゅうび}劉備、^{かんう}関羽、^{ちやうひ}張飛の3人が、張飛の庭の桃園で、義兄弟の契りを結んだ場面です。

弘化2年(1845)、逸翁が数えて46歳時の作。確かな筆致でもって、鮮やかな賦彩の人物を、淡彩の桃の樹が上手く引き立たせています。人物の顔貌表現や樹木の筆致など、岸派の特色がよく出た佳品と言えます。

本作からもうかがえるように、逸翁の34歳から46歳にあたる^{ほつきやう}法橋時代は、経験を積み重ねた実力と、覇気ある気力がとが響き合う、充実した時期であったと見られます。

石田家菩提寺の円常寺に伝来しました。



25 ^{からこあそ} 唐子遊び図 石田逸翁筆 2 曲 1 隻

紙本淡彩

縦65.7cm 横153.4cm

江戸時代後期

個人蔵

唐子遊び図の源流は中国画で、多くの子どもを描くことで子孫繁栄をあらわす吉祥画です。日本で描かれた画を見ると、吉祥画としての性格は薄れ、子どもの愛らしさを主眼とするものが多くあります。

本図もその好例。活き活きとした子ども達を描く唐子遊び図は、^{まるやまおうきよ}円山応挙やその弟子の^{ながさわろせつ}長沢芦雪などの作が有名で、円山派の好画題として知られますが、岸派の祖・^{がんく}岸駒が応挙門だったことから、岸派にもこの画題および画風が引き継がれていった可能性が考えられます。



28 『^{へいあんじんぶつし}平安人物志』 嘉永5年版 1冊

弄翰子編

紙本木版摺

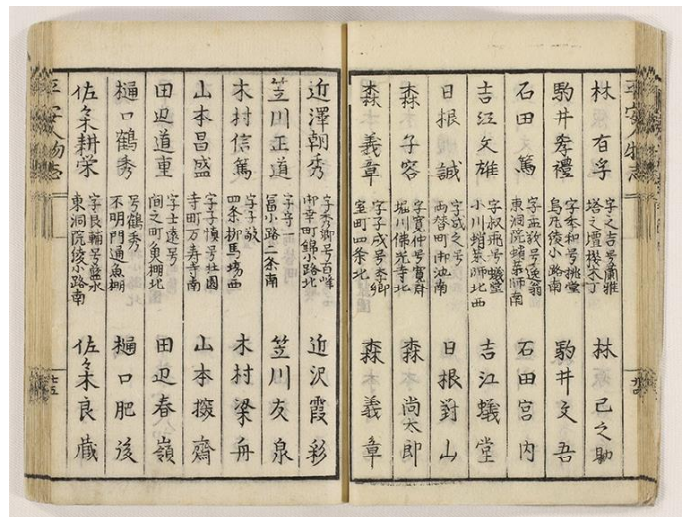
縦15.2cm 横11.0cm

嘉永5年(1852)

当館蔵

『平安人物志』は、江戸時代中後期に京都在住の文化人を記載した人名録で、学問修業に上洛する人へ向けて編纂されたものと考えられています。明和5年(1768)に始まり、慶応3年(1867)の9版まで、ほぼ10年ごとに増補改訂されました。

逸翁は、嘉永5年(1852)版に、「石田篤・宮内」の名で掲載されています。当時数えて53歳、東洞院蛸薬師南に居住していたことが分かります。逸翁が、当時、京で知られた存在であったことが分かります。



(石田逸翁の部分) ▲

34 ^{さくら さるす}桜に猿図 秀蘭筆 1幅

絹本著色

縦107.8cm 横39.8cm

江戸時代後期

個人蔵

秀蘭の比較的早い時期の作と考えられる作品。桜の葉先が糸状にのびて舞うように弧を描く、特徴的な形をしています。これは、もっぱら桜画を描いていたことで有名な女性、織田^{おだしつしつ}瑟瑟々(1779-1832)の画に通じるもので、葉先の表現に加え、芳醇な花卉や太い線を重ねることによって形づくる幹なども瑟瑟々のそれによく似ています。

瑟瑟々の住した川合寺町(東近江市)と秀蘭出身の高宮は16キロ程の距離で、24歳年下の秀蘭が生前の瑟瑟々を直接的あるいは間接的に知っていた可能性は十分にあります。ほかにも同様の桜を描いた秀蘭の作品が確認されており、秀蘭は、若い時分に瑟瑟々に私淑していたのかもしれません。

秀蘭画の多くは、本図のように、一筆一筆を至極丁寧な筆運びで描かれています。



39 善光寺式阿弥陀三尊像 秀蘭筆 1 幅

絹本著色

縦88.9cm 横35.5cm

江戸時代後期

個人蔵

長野の善光寺の秘仏本尊を摸したという、阿弥陀三尊像。一つの光背を背に三尊が配されることから、一光三尊阿弥陀如来とも称され、多くの信仰をあつめ、この形式の阿弥陀三尊像は、仏像、仏画、いずれも多く制作されました。

本作は、秀蘭の持ち前の素直で丁寧な筆遣いで描かれています。画中には、香を焚きしめ、身を清めて描いた旨の落款があり、特に注力して描いた画であることが分かります。石田逸翁の子孫の家に伝来しました。



45 蓮池図 秀蘭筆 6 曲 1 隻

絹本著色

112.3cm 横270.0cm

文久2年(1862)

個人蔵

秀蘭晩年の数え60歳の作。高宮の旧家に伝来したもので、法事等のために制作依頼されたものと見られます。

蓮池図は、浄土系寺院の障壁画によく見られ、それらを参考にして描いた可能性があります。丁寧な筆致は健在ですが、画面全体に静寂な空気が漂い、秀蘭の画技の奥深さを感じさせます。



(部分)